研究員に期待されるミッション

大学のビジョンに共感するステークホルダーの発掘

4000件の企業・卒業生データを精査し、多角的な情報に加え、経営者の理念や母校への思いを深く読み解き、寄付への理解が高い層を独自の視点でセグメント化した。他大学や公的な寄付事例も分析し、戦略的なアプローチ方針を策定した。

▼

取り組み内容

Step 1 課題の特定
学内の寄付に関わる業務や体制の把握とともに、寄付募集から意思決定の仕組みを理解。どのような戦略を取るか初期検討を行った。

Step 2 対象の選定
4000件のデータから寄付に関心を持つ層とその傾向などを分析して整理し、大学に共感する可能性をランク付けした。

Step 3 施策の実践
他大学などの事例を網羅的に分析し、金沢大学の強みを明確化。独自リストに基づく戦略的なアプローチで寄付獲得を実現。

Step 4 施策の組織資産化
リサーチ手法を組織の資産として共有。一過性の成果で終わらせず、継続的な運用基盤の構築に努めた。

共創型企業・人材展開プログラム 事例

CASE:

寄付から投資へ 概念の発展と 基金戦略の深化

受入企業

国立大学法人 金沢大学
基金・学友支援室長
松村 典彦 さん

国からの交付金に頼らない経営体制の構築を目指し、2008年に「金沢大学基金」を設立した。寄付を援助ではなく、大学の研究成果や有為な人材を社会へ送り出す「未来への投資」として再定義し、大学経営の柱の一つに据えている。寄付文化の醸成に向けて、この価値観を共有するパートナーとの信頼関係を築く持続可能な基盤づくりに注力している。

研究員

猿渡 智衛 さん

神奈川県出身。横浜市の小学校教員として12年間勤務した。その後、文部科学省に出向し、被災地担当として福島県をはじめとした被災地をめぐる。復興教育によるコミュニティー再生を志し、福島県で6年間、教育を通じた復興プロジェクトを主導した。自身の「一丁目一番地は復興」と位置づけ、能登の復興を優先課題として取り組む。

取り組みの成果
・
今後の取り組み

・大学への理解が得られやすいと分析されたアタックリストを作成した。これまではアプローチする際の明確な基準はなかったが、経験則に頼らないリストを活用し、実際に新たな寄付を獲得した。
・国内外の大学基金を分析したことで、金沢大学の強みを客観的に整理し、訴求ポイントを明らかにした。これによって参画する「ファン」層の獲得への基盤が固まった。
・今後は、構築した基盤をもとに、寄附募集活動を本格化させ、取組を次のフェーズへ展開していく。

企業の評価・今後の関わり方

参加理由

・金沢大学基金をさらに拡大するには、ファンドレイジング業務を次のフェーズに進める必要がありました。その実現に向けて、学内の知見に加え、外部からの専門的な経験や新たな視点を求めていました。本プログラムを通じ、通常の公募では出会えない人を得たいと参加しました。

評価（成果・社内変化など）

・猿渡さんは、ファンドレイジングの実務経験はありませんでしたが、教育者・研究者としての深い洞察力が、我々の活動に新たな視点を加える起点となりました。網羅的かつ深度あるリサーチを通じて、事業を次のフェーズへ進めるための基盤を構築したことが収穫です。

・既存の手法にとらわれず、教員として培った人を見る目を生かすことで、猿渡さんしか作れないリストができました。徹底した仕事ぶりは職員にとっても刺激となり、職場内の変革意識にもつながりました。

・猿渡さんの知見と経験を活用したことにより、事業を前に進めるための基盤を短期間で築くことができました。次のフェーズでは、この基盤を生かし、寄附募集活動を本格的に展開していきます。

今後の関わり方

・次年度も継続して活躍してもらいます。単なる資金調達ではなく、大学を応援してくれるファンを増やすという理念を大学の文化として定着させたいです。当事者としてだけでなく、我々の活動を客観的に評価し、持続的な改善を支える伴走者としての役割も期待しています。

研究員の評価・今後の展望

参加理由

・能登の復興にかかわりたいという強い気持ちがある中で、本プログラムに興味を持ちました。国の交付金に依存しないという金沢大学の姿勢に共感すると同時に、「お金を獲得する仕組みづくり」のノウハウに興味があり、応募しました。

評価（取り組み・生活）

・限られた時間の中で取り組む必要がありましたので、卒業生の経営する企業WEBサイトなど、多くの公開情報を読み込みました。企業の活動や経営理念から多角的に分析し、共感の可能性を整理しました。

・「自ら資金を獲得する」という考え方は、学ぶべきところが多いです。今後、自治体の運営や復興支援において、自分たちで資金を調達し、共感の輪を広げるというマインドの転換は重要性を増します。このサイクルに気づいたのは、さまざまな活動をする上でプラスでした。

・金沢大学で研究員をしながら、能登の復興に取り組める環境はベストです。専門知識を組織に還元し、週末は能登へ。ワークライフバランスが取れた生活は充実していました。

今後の展望

・引き続き、基金・学友支援室に残ります。単に業務をこなすだけではなく、学び直しの機会と捉えており、これからの自身の成長につながると考えています。復興に向け、能登へ知的資源を提供する方策も検討していきます。